

# 異文化への日中の対応比較(1)

清水徳蔵

## 目次

まえがき

一、日中の異文化の受容

二、異文化への日中の対応

(一) 日本の異文化への対応

1 受容のセンサー

2 日本文化の重層性

3 愛と憎の伝統的センサー

4 選択的受容のセンサー

5 受容から拒絶そして創造へのセンサー

(二) 中国の異文化への対応

1 中国的思考様式のフィルター

2 中国語の言語特徴のフィルター

3 官僚システムのフィルター

4 中華意識のフィルター

(1) 天命思想

(2) 「中体西用論」

まえがき

「五・四運動」<sup>(1)</sup>がさかんな頃、一九二〇年にバートランド・ラッセルが北京大学（学長蔡元培）の招請で中国を訪問し、そこで、中国共産党の創立の準備をしていた陳独秀や李大釗らの教授陣、「白話運動」<sup>(2)</sup>を指導した胡適教授らと出会って、新しい中国の動向を感じとったようである。そこで、ラッセルは、「西欧文明の長所が科学的方法であり、中国の文明の特徴は人間主義・人生の目的の追求という点にある。この両者の融合が期待される。中国人にはそれをなしとげる希望がある」<sup>(3)</sup>と東西文明の融合への希望を、そしてその役割りを中国人に期待した。しかし、その後の中国の悲慘な歴史の故に中国の人びとへの期待は遠くならざるを得なかった。

中国より早いスピードで西欧的近代化への道を歩みだした日本は、第二次大戦後、アメリカ文化の下に入って、再び西欧文化、アメリカ文化の受容と学習の中から日本の特色をもとうとしつつある。このような状況の中で西側からは西欧の機械文明・物質文明というものと、東洋の精神文明との融合によって、西欧文明の下での人々の救いたい絶望からの救いを求め、他方過去において精神文明を維持した誇りを持ちながら非近代的な後進的生涯に甘んじている東洋の人びとは近代化への道を求めようとしている。すなわち東西両文明の融合によって東西両文明圏の人々の救いを求めようとしているわけである。その使徒として、日本や中国への期待が高まっているわけである。

ここでは、東西両文明の融合に、東西両文明の救済に、日本や中国が役割をはたすことができるかどうかという事とも関連し、またその前提として、異文明に出会った場合、どういう対応を日本と中国とがしてきたか。異文明に対して、拒絶と受容と創造とをどのようにしてきたか。また将来、どういう対応が考慮されるかを明らかにする必要があるであろう。

日本と中国との異文明に対応する仕方の相違を検討しながら、その相違が日中それぞれの独得な思考様式、文化的特質、発展段階などの相異によってもたらされていることを考察してみようと思う。それは日本と中国との相違、文化構造の相違、日中の思考と行動様式の相違を明らかにする一助にもなり、東西両文明の融合を考察する場合の一助ともなると考えるからである。また、外来文化、異文化への対応の良否がその民族と文化の命運にもかかわるからである。

かつて、本紀要一九八三年第十号で、「中国的思考と行動様式―日中の比較を中心として―」の論文の中の「外

来文化の受容の構造」の相違について言及した。それは拙著、中国的思考と行動様式——現代中国論」（春秋社）に集録した。その中で、異文化の受容に際して、日本は二つのセンサー、すなわち、日本的風土と日本的思考というセンサーの作用で選択的導入をする。寒暖の交代によって、寒期にはツングース系の騎馬遊牧民族の血の作用によって富や文化に対する旺盛かつ貪欲な吸収と受容をする。暖期になると南方農耕民族の血の影響を受けて異文化の受容に消極的となり、かつて貪欲に吸収した異文化を消化し、発展し、日本的なものに創造するというセンサーの作用について紹介した。すなわち、受容と拒絶と創造のセンサーの作用が働くのが日本の特長と云いうる。

他方、中国の異文化受容には、二つのフィルターがかけられるということ、一つは中国語に翻訳される場合に中国化される。他のフィルターは中華意識のフィルターで、異文化を異文化として認識せず、もともと中国にあったものが、中国に里帰えりしたものとして、同質・同根のものとして認識するために、弁証法的な対立物の統一という創造が行なわれないという特徴があることを紹介した。本稿では、再び、この問題について再論・再検討を加えてみる。

第一部（本稿）では目次に示した通り「日中の異文明の受容を概観し、異文明に対して日本と中国が採った仕方を史的に検討し、異文明への拒絶・受容と創造の構造に影響している文化的特徴と思考様式とを検討する。

第二部（次号）では、水平的に日中の対応を具体的に比較する。例えば、宗教の伝来について、天文学の伝来について、西洋科学の伝来等について、日中の対応を水平的に比較してみようと思う。

## 一、日中の異文化の受容

### (1) 日本の異文化の受容

日本が統一国家としての姿をもたなかった頃から遊牧騎馬民族の文化、中国大陸の文化、南方農耕民族の文化などが細々と流入していたと想像される。三・四世紀の頃から統一国家形成への進行がみられ、朝鮮半島へも勢力の伸展をはかり、積極的な中国文化の受容が始まっている。

日本が異文化を攝取した過程は四つの時期に分けて考えることが出来る。

#### 1 朝鮮半島經由での中国文化受容

##### (1) 漢学(儒教)・漢字の伝来と影響

西暦二八四年、応神十五年に百済から皇太子菟道稚郎子の師として阿直岐が来日し、翌十六年に王仁も皇太子の師として来日、論語十巻と千字文一卷を献上した。これが中国の儒教と文献の最初の伝来であった。つづいて百済から多くの集团的帰化があり、中国文化を伝えた。しかし、この中国文化の初期の招来は一部上層階級——貴族社会に限られ、一般には普及しなかった。しかし、固有の文字を持たなかった日本は漢字を得て、言語思想の記文表記が出来るようになり、中国文献を読み、大陸の事情を知ることが出来るようになった。知的世界が拡大されたわけである。

また、儒教の影響は皇位継承に表われた。親の意志による撰定相続の習慣があったが、弟の菟道稚郎子が兄の

大鷦鷯尊(仁徳天皇)を越えて、応神天皇崩御後・太子の位についたことを潔し<sup>イサギヨ</sup>としないで自殺によって兄に即位させるといふ事件になつてあらわれた。論語の「長幼の序」の五倫の道に背いてはならないといふ教えによるものであった。仁徳天皇が民の竈<sup>カマド</sup>から立ちのぼる煙の少ないのをご覧になつて三年間の課税の免除、宮殿造営を延期して欲しいとの民の声を尊重されたといふ日本書紀の記述も中国の聖王の記述の影響であろう。反正天皇崩御後、皇子がないため、皇弟(允恭天皇)の即位を群臣が奏上した際、允恭天皇は位を世の賢者に譲位されようとしたのも儒教の影響であつたと思われる。

天命思想も最初は若干の影響をした。儒教では帝王は徳のある者が天の命をうけて、天に代つて天下を治める(禪讓)。もしその徳をうしなえば天は命を革めて他の徳のある者に天命を授けるといふ天命による革命放伐思想を説いている。この天命というものは人心が就くか離れるかによつて決まるという。いわゆる民の声によつて決まるとする。民心が離れたら帝王でも誅してもよいとしたこの天命思想による革命思想は日本でも最初はやはり若干の影響をした。例えば、眉輪王が安康天皇を弑し、蘇我馬子が崇俊天皇を弑し、藤原基経が陽成天皇を廢して光孝天皇を立てたり、北条義時が善政の名で天皇を島に遷すといふことをした。しかし、それ以後、貴族政治の日本ではこの天命思想は影響を残さなかつた。

## (2) 漢学(儒教)の影響からの離脱

儒教の伝来直後は盲目的な活潑な受容が行なわれたが、受容が一段落すると、平安期の後半期には、儒教を始めとする中国文化の影響、中国文化風からの離脱をはじめて、日本化への創造を始める。

文字——孤立語の漢語では膠着語である日本語の語尾の変化や情緒を表現することが不都合となり、表意文字

の漢字を表音文字に転用して、その形を改めて、假名(カタカナ、ひらがな)がつくられて国文の表現が豊かにかつ自由となった。

漢学から国学へ——近世まで儒教の倫理が観念の上では權威を持ちながら、実生活では儒教とは異った人倫の生活が実践された。また漢学の流行とは別に、町人生活の現実を素材にした国文学に移行した。

日本文化は中国文化の影響によってその内容を豊かにして新たな展開へと進むインパクトを受けた。他方、中国文化を吸収・消化して独自の特色を発揮する方向をとった。すなわち、萬葉集・源氏物語とか徳川期の西鶴・近松のように、漢学の教養がその作品をさらに大きくしたと言える。

### (3) 中国科学の受容

西暦五五三年、欽明天皇十四年に百済に使者を送り、医・暦・占いの博士と暦の本、各種の薬を送ってくれるように申し入れた。その翌年、百済から易・暦の博士が来日したことが最初の記録として残されている。その結果、小治田朝<sup>オハリダ</sup>の十二年、西暦六〇四年には暦をつかつて日付を決めたと伝えている。西暦六九〇年、持統四年、日本書紀の記録では、中国の「元嘉暦(百済が使用)」「儀鳳暦(唐暦、新羅で使用した唐暦の『麟德暦』のこと)をつかつて毎年の月日を計算したという。文武二年、西暦六九八年には儀鳳暦(唐の麟德暦)が使用されだした。

### (4) 仏教の伝来初期

高句麗や新羅の侵略を受けて苦しんでいた百済が日本の支援を期待し、仏教の伝来以前に、百済が欽明天皇のために大きな仏像を造仏して、欽明天皇の勝善とご威徳を祈り、その恩恵に百済が浴することができるようになるという願文をかかげた。西暦五五二年、百済は聖明王を派遣して、仏像と經典と僧とを伝来して、その功德を説い

て日本の支援を期待した。しかし、「百濟」は新羅に滅ばされ（西暦五五五年）、聖明王も戦死した。

当時仏教伝来をめぐって、仏教受容賛成派の蘇我氏（稲目）と仏教受容に反対する物部氏（尾輿）との権力闘争が行なわれたが、蘇我氏が勝って仏教の受容はさかんとなり、欽明天皇の御代に仏教はさかとなった。五七八年（西暦）、敏達天皇の時に新羅が仏像を献じてきた。その後、仏教が興隆をみ、仏教の受容がさらに容易となった。

仏教の最初の受容の頃は、教文、經典などを読むことも理解することも無理で、現世的利益とか因果応報といった判り易い程度のことしか理解できなかった。仏教信仰とは教理ではなく、信仰の対象としての仏像への礼拝などの宗教上の儀式が中心であった。仏教を最初受容した際は、その仏像の端正さ、端嚴さにひきつけられたのではないかと思われる。受容した最初は皇室や貴族の間で行なわれ、仏法は王法であり、帝王の法であり、国家を護るものとして信仰された。奈良時代になると、仏教の全盛となり、仏法の現世的御利益を求めることが中心となつて仏教が弘まった。

#### (5) 学問・芸術その他分野での受容

① 医学——西暦五五三年、允恭天皇のとき新羅から医師を招いて治療し、翌年には欽明帝の御代に百濟から、医博士、採薬師が渡来。西暦六〇八年、推古帝の御代に医学生を遣唐使とともに留学させ、西暦六二三年に唐から医学を招来。同年新羅からも医学伝来。

② 天文学と暦学——欽明十四・十五年、西暦五五三・四年に百濟から医博士が交代で来朝し、暦本も伝来した。

③ 絵画——雄略帝の御代に百濟から絵師。

④ 歌舞・音楽——すでに天照大神が天岩窟にかくれられたとき天鈿女命が歌舞を演じたと伝えられているよ



うに、すでに早くから歌舞があつたことは当然なことであるが、西暦四五三年に、允恭天皇の崩御に際し、新羅から、調船<sup>ミツゼツネ</sup>八十隻、楽人八十人と楽器が贈られ、哭泣し、歌舞をしたという。このとき大陸系の歌舞、音楽が伝来したと思われる。

⑤ 土木・建築——西暦二七六年、応神七年、高麗・百濟・任那・新羅から大陸系の土木技術というものが入ってきて、「韓人池」という貯水池をつくつたと日本書紀に最初の記述がある。また新羅から建築の方法が西暦三〇〇年、応神三十一年に入つたと伝えられる。

⑥ 彫刻——西暦五七七年に仏教の伝来とともに仏像をつくるための中国の造仏彫刻法が伝わり、百濟から造仏師が伝来。西暦五八八年、百濟から大陸の鑄造法が伝来して、金銅仏の鑄造や仏像・仏具の金メッキが出来るようになる。

⑦ 酒の醸造——古くから麴で酒をつくる、すなわち麴を利用した白酒<sup>シロキ</sup>・黒酒<sup>クロキ</sup>の二種の濁酒がつくられていた。そこへ応神期に百濟から新しい醸造法と酒作り人が来日して良酒の醸造酒がつくられた。

⑧ 製陶——昔から素焼きの土器がつくられ、弥生期には弥生式土器から土師<sup>ハジ</sup>の器に発展していた。西暦四六三年、雄略七年に百濟から新漢陶<sup>スニツクリヤ</sup>部高貴が来朝、大陸の製陶技法が伝来した。西暦四七三年には、釉薬を用いて光沢をだす技術も入ってきた。

⑨ 織物——魏志によると、三世紀の頃、日本には良質の麻布・絹布・真綿を生産して大陸へ輸出していたという。なお日本書紀によると、西暦二八三年、応神期に「百濟から縫衣の工女を貢す」とある。雄略の期には、呉に使者を送って縫工女を求めようとし、まず使者は高麗に渡って呉に入り、中華の呉から縫織女を伝来したと

いう。

## 2 中国文化の直接的導入

### (1) 遣隋使による仏教美術の導入

日本書紀によると、西暦六〇七年、推古十五年に、小野妹子の一行が遣隋使として派遣されたという。聖徳太子が、中国に統一王朝の「隋」が出現したことから、朝鮮の新羅との戦争から手を引いて、隋王朝と関係を結び直接に中国文化を摂取しようとした。太子は隋との対等な関係をつくろうとして、「日出ずるところの天子、書を日没するところの天子にいたす。つつがきや——」という著名な国書で隋の煬帝を激憤させた。この隋への派遣船は四回実施され、法隆寺をはじめとする多くの寺院建築、釈迦三尊像・百済観音像・薬師如来像などの仏像、王虫厨子、天寿国曼荼羅などの工芸品に代表される「飛鳥文化」の発展に強い影響を与えた。西暦六一〇年頃、曇徴が来朝して、中国の絵画技術と紙・絵具の作り方を伝来した。

### (2) 遣唐使による唐文化の導入

第四回遣隋使(西暦六一四年)から十六年後の西暦六三〇年、第一回遣唐使が派遣された。そこで彼らは国際色豊かな新興の気旺溢した長安の都に圧倒された。「律令(法令)」によって着々と中央集権国家をつくりつつある唐、その官吏任用制や「均田法」の土地制度などに新鮮な魅力を感じ、唐を模範として、蘇我氏から権力を奪回して、天皇の権力を中心とした中央集権国家への建設を思考し、中大兄や鎌足らと改新派をつくることになる。西暦六

四五年(皇極四年)六月十二日大化の改新のクーデターに成功。唐制度の模倣をはじめ。六六三年の白村江における唐・新羅連合軍との戦いで日本の百済支援軍が敗北したことによって百済が滅亡。六六八年に高句麗も滅ぼされ、百済と高句麗から亡命者が渡来し、知識・技能が多く伝えられ、唐の影響と相いまって「白鳳」期の仏像たちがつくられる。とくに、薬師寺三尊の金銅薬師如来・日光菩薩・月光菩薩はフエノロサが日本の彫刻のなかでこれ程美しいものはないと驚嘆したくらいで、白鳳美の代表である。なお白鳳期には漢字の音と訓とを借りて日本語にあてはめた「万葉仮名」がつくられ「萬葉集」として和歌が収められている。第一回遣唐船(六三〇年)から三〇〇年の間に十八回が任命され、実際に入唐したのは十五回で唐の文化を招来した。七一〇年には唐の長安をまねた奈良の都がつくられ、「天平文化」が唐風と仏教色の強い特色のある文化として発展し、のちの日本文化の基礎となった。当時唐から五月五日の「菖蒲の節句」、七月七日の「タナバタ」、七月十五日の「うら盆」などが移入された。

西暦七五六年、聖武天皇の崩御の四十九日の法要がすむと、光明皇后は、天皇が愛用された日用品や秘蔵品を東大寺の「正倉院」に収められた。のちに、大仏開眼の儀式につかった宝物・書類などがおさめられた。

西暦八〇四年(延暦二十三年)の遣唐使船で最澄(三十七歳)、空海(三〇歳)は桓武天皇が奈良仏教界の墮落の改革をするために、二人を特別に派遣された。最澄は鑑真が招来した天台宗を修業していたので、中国天台宗の本山(浙江省)で天台宗と密教と禅を学び帰国(八〇五年)後、比叡山に日本天台宗を開立。空海は長安の青龍寺でインド僧恵果<sup>ケイカ</sup>と出会い真言密教の第八代の師位を認められ、さらにサンスクリットを学び、帰国後、京都の東寺に真言宗を開いている。

この時期に注目されるのは、大化の改新への唐の律令制、中央集権制の影響と日本の選択である。「大化の改新」では当時の地方分権的氏族機構を改めて唐にならって中央集権の国家体制をつくって法治体制をつくった。この際、聖徳太子の指導で隋・唐に留学僧を送って、隋・唐の文化・仏法を学ぶほか、隋・唐の法制の研究をした。それが、「大化の改新」の理論づけに大いに役立った。当時の豪族は各氏族の神を崇拜していたので、その豪族たちを仏法によって統一しようとした。「十七条憲法」にはまた中国の思想が強く影響した。すなわち、儒仏の二教をもって根本思想として。「和を以て貴しとなす」「礼を以て本となす」「信は是れ義の本」というように儒教の道徳的政治論を利用したり、仏教の「篤く三法を敬え」などの思想を採用している。

しかし、後述するように、律令制や均田法は、日本的に修正している。

### 3 近世における西欧文明との出会い

中国文明（漢文明）圏に組み入れられていた日本は、近世において、西欧の科学文明に出会い、中国とは違った対応をした。

蘭学「オランダ文明」が入ってくる前に、日本は中国を経由して入ってきた西側の近代文明の初期のものに触れることができた。中国に西欧の近代科学文明が入ってきたのは十七世紀の「明王朝」末の時代で、イエズス会の宣教師たちが、中国に西欧の近代文明を紹介した。しかし、その場合、紆余曲折を経て、中国が最も熱意を以て導入したのは「西欧の天文学」であった。そのうちでも、最も関心を示したものは「暦法」であった。この中国が関心を持って導入した「西欧天文学」を日本は蘭学が日本に入ってくる前に中国から知ることができた。漢訳された西

洋の天文学、とくに中国が強い関心を持った「暦法」に接していた。

すなわち、蘭学が入ってくる前に、日本が接した西洋の文明というものは、漢文で書かれた、中国が最も関心を示した西洋天文学——とくに「暦法」であった。

蘭学が入って来てからは、直接にオランダ語を学ぶことで、直接に西欧文明に触れることができた。当時の日本の社会は、徳川江戸中期で、中国の「官僚主義社会」とは違って、厳格な「世襲制」にしばられた社会であった。厳しい世襲制にしばられた、家柄がすべてを決定するという社会であった。したがって、才能がいくらあっても、身分が低い生れの者は、「立身出世」などということは望むことはできなかった。出世の難しい身分の低い者は、ゴリ押しをしてエリート・コースに乗るか、自分の人世の「身すぎ世すぎ」のための資格を得ることに熱中しなければならなかった。さもないければ、自分の人世を投げなければならなかった。人世も投げない、ゴリ押しをしてエリート・コースに乗るようなチャンスのない、心ある者は「新しい学問」、「ヨーロッパ文明」に関心を向けて、身分の低い者がその境遇に対するやるせない思いを発散させようとしたようである。

明治維新後、日本は富国強兵のためにまず西側の近代科学技術を導入することに心掛けた。その後、近代科学技術文明を支えている西欧の近代文明の人文・社会・政治の制度にまで導入の幅を広げ、著しい変化と発展をあげた。日本の場合は、中国とは異って、全面的な西欧の近代文明を導入し、スピードの早い西欧型の近代化の道を歩みだした。

#### 4 アメリカ文明の導入

第二次大戦、大東亜戦争の敗戦後、戦勝国アメリカ軍の占領下に入り、アメリカによって敗戦と破壊の危機から脱出して、すべてがアメリカ文化のルツボの中に入る。鬼畜米英打ちてしまんとか不俱戴天の敵として戦ってきたアメリカに敗れた途端、アメリカの占領下に衣食の問題の解決を依存してから、すべてアメリカ文明にビッシヨリと浸ってしまう。食べるもの、飲むもの、着るもの、視るもの、聞くものすべてアメリカ色一色となる。さらに、アメリカの思想・文化・教育・科学技術・軍事が日本を蔽う事になる。敗戦後の日本人は敗戦のショックによる虚無の中から、すべての日本のもの、古い日本に嫌悪までいだいて、日本の歴史・日本の伝統を惜しげもなく投げ捨てた。アメリカの文化・科学技術・教育・思想を旺盛に、貪欲に吸収・模倣し、それを日本的に変容し、アレンジして日本に適するように日本化している。まさに、米・英の西欧文明に対する憎と愛、拒絶と受容のパターンの繰りかえしである。

## (二) 中国の異文化の受容

中国文化の柱は甲骨文字と青銅器であった。それは夏・殷時代までの中華の人びとが、神との一体化したかわりの生活と政治の中から発生した。とくに、青銅器や土器には古代オリエントとかかわりがあるのではないかと多くの学者が研究している程、似かよったところがある。

仰韶文化の彩色土器、竜山文化の縄席叩き文様のある土器や冶金には、古代オリエントの製陶技術と冶金技術にきわめて似たところがあると注目されている。

オリエントの金属文化は南シベリヤ、モンゴル、甘粛に入ってきていたようである。しかし、中原の殷代の青

銅器文化とは若干の相違がある。影響があるのか、独自発生のものか、いまだ明らかでない。

例えば、モンゴル・甘粛で出土したスキタイ系の金属文化には、鍛造と鑄造の二種があり、青銅器の文様には、空想上の空飛ぶ「有翼獣」の文様がみられている。

一九八七年十二月二十七日の新華社電<sup>(4)</sup>は、一九八八年の干支(えと)である「竜」のルーツが、内モンゴルで出土したと伝えている。

「中国の考古学者が内モンゴルの『敖漢』<sup>アオハン</sup>にある約六千八百年前の新石器時代の遺跡を発掘したところ、奇妙な陶器が発見された。その陶器には、頭がイノシシ(猪)で、体が蛇、しかも有翼の奇妙な動物が画かれているが、『竜』の原形であろうと注目されている。狂暴なイノシシと危険な蛇との組み合わせは、神聖さの象徴であり、両者の合体は最高・最強の空想の動物をつくりだしたと説明した」と。

すなわち、有翼の竜、ドラゴンのルーツが六千年も前に空想されていたというわけである。

ところが、殷の人びとの金属文化には鍛造はなく、ほとんどが鑄造であった。また、文様もまだ空想の動物を画く程にはいたっていなかった。それは「現世主義の中国人が、現在の生きている生活の世界を重視するという中国人の思考様式の反映であったかも知れない。神におぼれた、神と一体化した生活をしていた殷の人びとは、祖霊を祭るのに酒や穀物や犠牲を供物としてそなえるが、その器として青銅器を使用した。酒の器には「爵」<sup>セウカク</sup>「觚」<sup>コ</sup>「觥」<sup>コウ</sup>「罍」<sup>レイ</sup>「鬲」<sup>リキ</sup>などがつくられ、文様としては、空想的要素よりも、お供物を悪霊から守るために、容器に怪奇な獣面文様、たとえば虎や水牛などの獣面を怪奇なマスク模様とした「饕餮文」<sup>トウテツモン</sup>が飾られた。スキタイ系の「有翼獣」、すなわち、虎の有翼、一角獣の有翼などがあらわれるのは前漢から後漢にかけてであり、

このスキタイ系の造型美術は、のちに、中国の人々が仏像や帝王像をつくる基礎となったようである。

さらに、古代オリエントのガラス製造技術が戦国・漢時代に「大月氏」を経て東漸して、オリエントのソーダガラス製造技術は、中国では、鉛丹技術を加えて鉛ガラスの生産へと発展した。また、五世紀の「北魏」時代には、大月氏の商人の渡来によってガラス容器の生産が可能となっている。

紀元前四〇〇年から二〇〇年の戦国時代には匈奴の影響から胡服・騎射の遊牧民族の習慣が導入された。

中国の春秋・戦国期にはペルシアのアケメニード王朝と中国とのある種の接触が蘭州付近で行なわれていたように、インド人の仲介によってインドの思想や地理などが断片的に中国にもたらされ、また商人たちによって、西方文化が、とくに天文暦法に関する知識が入ったようである。さらに張騫に始まる西域経営によって、儒教の礼楽に必要な楽曲や楽器がイラン・インドから入り、琵琶や箏篋（ハープ）も伝来している。漢代には楊柳（小型座具）や胡牀（イス）がイランから入った。植物では、その頃、葡萄、苜蓿（うまごやし）、胡麻・胡瓜・胡豆・胡蒜・胡桃・石榴・胡蘿蔔などがイランから伝来した。

漢末から後漢（西暦五八―七五年）の頃にすでにインドから仏教が伝来し、一部の知識階級の間信者がいたようである。桓帝の頃（西暦一四七―一六七）年に月氏人などによって仏典の中国語訳が行なわれたが、儒教や神仙思想の中に入ることは難しく、それらと妥協して入り込んだという。隋が天下を統一するまでの約二百年間、中国の混乱期で儒教の權威も低下して、仏教が人びとの心に入り込んだ。マジナイとか予言というようなもので近づいて仏教を宣伝した。

仏教とともに仏教画がインドから中国へ流入してくる。五胡十六国時代以来、西域から伝えられた仏教美術の



攝取はまず、敦煌の壁画に、ついで大同の雲岡石窟となり、洛陽の竜門石窟と徐々に中国的な仏像・仏画へと変わる。まず敦煌では北魏から宋代までかけて彫っているが、それぞれ、ガンダーラ、グプタ、イラン、チベットの各様式など多岐にわたっているが、中国風になり同化されている。雲岡石窟は北魏(西暦四五五年)から西暦四五九年の孝文帝まではガンダーラ様式がそのままに影響をとどめており、大同特有の神秘的な美しさを示している。龍門は奉先寺の則天武后をモデルとした仏像にみられるように、中国的色彩が強い。

文様も、周漢時代は怪獣・動物・幾何文様が主流で、植物文様はほとんどない。北魏になると、雲岡も龍門も連続波状唐草模様などの唐草文様が盛となる。これは西域もしくはインドの仏教的要素やガンダーラの要素(ギリシャ)が混在している。

唐時代はまさに異国情緒に満ちた時代、長安・洛陽は胡服・胡帽・胡履・胡食・胡楽が溢れた。絵画もイラン風、彫刻もイランの浮き彫りの影響、音楽も中国伝統の雅楽にかわって西域の音楽——イラン文化圏のものが主となる。白楽天の胡旋女の詩のような胡旋舞が流行。

元時代には、イラン勢力にかわってアラビア的色彩のイスラム文化、とくに天文暦算・地理・砲術などの自然科学が流入。

「清朝」時代は「明朝」末期よりも閉鎖的社会で、日本と同じような鎖国状態にあった。

明朝末に中国を訪れたイエズス会派の宣教師たちは、自ら中国語を学んで、西欧の科学書を中国語に翻訳し、それを中国人が学んだ。古来中国の社会は読書人が官僚になるという官僚主義制度が長く続いてきた。それは伝統的な儒教の教典を勉強することで、官吏登庸の「科挙試験」に合格したものが官僚となって立身出世をしたもの

である。したがって、官僚たち及び官僚予備軍たちは近代文明に対してほとんど関心を示さなかった。

一八四〇年のアヘン戦争の結果、鎖国からの開国を迫られ、近代列強が中国に入ってきた。このときはプロテスタントの宣教師たちが中心となって近代科学を中国へ紹介した。このときも、宣教師たちはやはり中国語を学んで、中国語を通して西欧の近代科学文明を教え、科学関係の教科書を中国語で翻訳して紹介した。

他方、中国の読書人たちは積極的に外国語を学ぶというをしなかった。清王朝末期にはいくらか変化をみせたが、日本が明治維新後に積極的に外国語を学びあらゆる分野、科学技術を重視し、それを支えた政治・倫理・哲学なども学んだのとは対照的で、中国は西欧の近代文明を導入して富国強兵に役立てようとしたことは同じで、富国強兵に役立つ科学技術は導入した。しかし清朝末期には、政治・哲学・倫理では中国の方が優れていると自負していたため、それらの輸入をせず、西欧文明の一部分の導入だけで、全面的な導入はしなかった。悪い面の中華意識が反映した。

十九世紀後半には、洋務運動が起り、「中体西用論」なるものが主張された。これは、中国の政治や倫理・哲学がすべての中心であって、「体」である。中国の文化が「本体」であって、西欧の近代文明は中国文明から発展したもので、「用」である、道具だ、支流という主張である。中国の富国強兵のための道具であるという考えである。しかし、この洋務運動も結局失敗して、古い中国の政治・倫理を改革すべきだという声が高くなった。

一九一一年の辛亥革命で清朝が倒れて中華民国の時代になった。その時代は親米英政策を採用して、西欧近代文明を移入し、西欧化をはかって、科学やデモクラシーなどとやや幅広い導入をはかりだした。しかし、日本の明治維新後のような順調な科学技術の導入は行なわれなかった。

簞内清教授はその著「日本と中国科学」<sup>(5)</sup>の中で、辛亥革命直後の中華民国の西欧近代科学の導入が順調でなかった要因として、次のように五つの要因を指摘している。

1、二六七年間も続いた清朝を滅して、統一政府をつくったが、中国各地に軍閥が轄拠してしまい、それらの軍閥がそれぞれ外国と結んで、かえって国内混乱を促した。

2、学者や読書人が科学技術の導入を主張したが、政府にはそれを進める力が乏しかった。

3、科学の導入・発展をはかる人材も乏しかった。

4、孫文・魯迅・郭沫若も中国の人びとの病気を直すために医者を目指した。しかしみな、一人の病人を救うよりも、国家の病を救い、治療する方が先決だと考えて革命への道を進めた。科学の必要性を十分に認識していたが、彼らにとって、中国を列強の侵略から救い、新し中国の独立・統一をすることのほうが大切であった。したがって、西欧近代科学技術の導入はプライオリティが次位となっていることを示した。

5、一九二七年に北伐を終って、国民政府が一九二八年樹立された。それから、組織的な科学研究を開始しようとしたが、一九三七年に日華事変が発生し、つづいて第二次大戦が起り、中華民国の科学研究も挫折した。

一九四九年に中国共産党が樹立した中華人民共和国も、毛沢東時代はソ連モデル一辺倒で、これは科学の総合的な発展よりも、中国の国防と国防科学技術の発展を優先して、総合的科学的分野の発展を阻んだ。一九七九年以来の鄧小平路線は、対外開放政策によって西側の科学技術を導入しようとしているが、モザイック的導入で、科学の発展・創造に必要な文化体系の導入を社会主義の原則によって制約しているので、近代科学の発展・創造には制約がある。

## 二 異文化への日中の対応

### (一) 日本の異文化への対応

異文明に接したとき、どのような対応をし、どのように拒絶するかもしれないかは吸収するか、またそれをどのように発展するかは、その民族の伝統的思考や文化の特質が強く影響するものである。

#### 1 受容のセンサー

##### — 外国崇拜の伝統 —

日本は古くから漢文明・漢文化を導入して漢文明・中国文化の文化圏にあり、明治維新までは、漢文化が常に主流であった。

大陸(ツングース・中国)からと南方からと衣・食・住の生活様式が最初に導入されている。雄略天皇の頃、中国から養蚕と絹織物の技術を導入し、「衣冠の国風」にすることが「日本書紀」の雄略天皇の遺詔として指摘されている。それは中国風に整髪して、頭に冠をかぶり、ゆったりした衣服を着用する衣冠が採用された。衣服の中国化が行われたように、衣食住の生活様式から考え、儒教・宗教・科学にいたるまで中国風であった。

明治維新とともに、日本はあっさりとそれを忘れ、質の異った西欧文明を導入した。いずれの国でも異文明が入ってきた場合、その国の伝統が何らかの抵抗を見せるものである。日本の場合、明治維新後は、古い伝統をむしろさっぱりと忘れ去って新しい西欧文明を受け入れた。日本の思考の一つは「新奇」「珍しいもの」への貪欲

な関心を示すことであり、逆に日本人にとって「伝統」とは古いものであり、保守的なものであり、進歩をさまたげる「悪」だと考えてしまう場合もあった。新しいものへの憧憬が強くなると、古き良きもの、奥ゆかしいものをすっかり捨ててしまう。例えば、町名とか道路とか、歴史を持った、ゆかしい名前を持ったものがかなぐり捨てられてしまう。絶えず新しいもの、新しいものを求める。古いものや伝統的なものを捨ててしまつて新しい文明を貪欲に受け入れる。したがつて、日本人から独創的な文明をつくりだす喜びを奪ってしまったと、藪内清教授は指摘する<sup>(6)</sup>。

日本人の異文化に対する第一の特徴は異文化への崇拜にある。和辻哲郎先生はその著<sup>(7)</sup>の中で次のように指摘する。

「優れた異文化に接して、それを受容するとき、外国崇拜と自国蔑視の態度が強くあらわれる。新しく受け入れたものを尊重するの余り、自国の伝統的なものを捨ててしまう。このような態度そのものが日本民族にとつて伝統的な思考でもあった」と。

確かに、仏教の導入も、儒教の導入の場合も、明治維新の西欧近代文明の導入の場合も、第二次大戦後も、自己の伝統を忘れ、自己を謙虚にして外国文化を崇拜するという日本民族の一つの伝統的思考と行動様式があらわれている。外国崇拜、優れた文化に対する憧憬と鋭敏な感受性とを持して、それを謙虚に受容してきた。四海外に囲まれた日本は海外との接触がわずかであつたが、世界で最も優れた東洋の文化を咀嚼・吸収し日本的な創造をはかつてきた。

徳川末期、すなわち幕末期には、鎖国が尊皇攘夷だと、西欧列強の進出の動きに対応しながら西欧文化の吸収

に強い抵抗を示した。しかし、明治維新となると、その富国強兵のために、西欧近代文明を貪欲に導入し、中国・印度などの文化が深く浸透していたにもかかわらず、東洋のどの国よりも西欧文明の導入を活発に旺盛に貪欲に行なった。

第二次大戦中、「鬼薨英米を打て」とアメリカと戦ったが、敗戦後国連軍の占領となると先日までの敵意識をかなぐり捨てて、アメリカからアメリカ文化、アメリカ科学文明を貪欲に導入し、近代科学技術文明を発展させている。

## 2 日本文化の重層性

和辻哲郎先生はつづけて、日本の伝統的な第二特性として、重層性というものを挙げておられる。「日本人ほど敏感に新しいものをとり容れる民族はほかにないが、同時に日本人程古いものを忠実に保存する民族もほかにない」と。確かに日本の文化の中には重層性という特徴も持っているようである。

例えば、衣食住でみると、衣の面では、武家階級や町人階級のなごりを残しているかと思うと、明治維新以後、第二次大戦以後の洋装化が重覆して使用されている。住居についてみると、和風と洋風のミックスという重層性が強い。畳とジュウタン、居間とリビング、蒲団とベットといった和洋のミックス。食事についても、和食・洋食・中華風と重層化している。

宗教でも、原来の信仰・仏教・キリスト教。

芸術分野においても、短歌・俳句と漢詩・新体詩。能楽・謡曲あり人形浄瑠璃あり、歌劇あり。絵では大和絵・

水墨画・洋画ありというように重層性を持つていることも特徴的な伝統である。

### 3 愛と憎のセンサー

ドナルド・キーン氏は「外国文化に対する日本人の対応を歴史的に見てみると、愛と憎、受容と抵抗の関係があるように思う」と指摘して次のように具体的な例を挙げている。

「九世紀の頃、奈良朝以後、唐文化圏の中にあつて、唐風が流行し、すべてが中国文化という時代があつた。それは朝鮮の新羅や李王朝が唐文化にビッシヨリと浸つていたように、唐文化が流行した日本でも、エリートは唐の言葉を話し、唐の言葉で書くという唐ぶりで、日本文化に対するコンプレックスをいだいていた時期があつた。

しかし、その中でも、エリート社会の女性や非エリート社会では日本語を使い、中国語の勉強はしなかつた。したがつて、エリート社会で男性から女性に意志や戀情を伝えるには、中国語、漢文では通じない。中国のようなドライな激しい風土で生まれた漢詩では、美しい風土と美意識に育てられた日本の貴族たちが、男性としての思いを思うまま書き、伝えるには漢詩では表現しきれなかつた。微妙な表現をするには大和言葉そして和歌の方が表現しやすい。

そうして、中国文化への愛、中国文化の受容、中国文化潰けの中に、徐々に中国文化への抵抗、中国文化への『憎』が芽生えてきた。紫式部の『源氏物語』、清少納言の『枕草子』の中で表現している『唐めく』という言葉は、『しやれたこと』『いいこと』というように中国文化への崇拜と愛を示す一方で、『キザ』なこと、『大和らしくない』と

いうように中華文化への「憎」と「抵抗」が生まれだしていることを示している」と。

#### 4 選択的受容のセンサ―

##### ―大化の改新における唐風の選択的受容―

西暦六四五年の大化改新には中国の思想や中国の法制などを導入して中央集権的国家体制を作ったが、その際、唐制を採り入れ、模倣して強い影響を受けた。しかし、「土地制度」「律令制度」において、日本の国情に適するように選択的な導入を行なった。

唐制の「均田制」は分田のほか世襲の永業田を給付し、丁男とそうでないものとの給付の量の格差を設け「十八歳以下の男子で戸主でない者、妻・妾以外の女子には何も給付されない。

日本の大化改新の「班田法」では、唐制の均田制を手本にしながらも、永業田のような世襲田を設けず、六歳以上の者には男女の別なく一定の田地を給付した。

唐制が労働力に応じた田の班ち方で、収穫の効果を期待したものであったのに対して、日本では広く人びとに利益の利を与えようとする土地均分の制度にかえた。

唐の「律令制」を母体として成文法典を制定し中央集権国家の型をつくることが、また大化改新の一つの重要な事業であった。

多くの点で、中国の唐との国情の相違があった。唐に比べて、当時の日本は国民の知的水準、国家の文化水準、経済、社会の発展水準が甚だ遅れていたし、中国と日本とは思考と風土の差があった。したがって、当時、わが



国が憧れた唐の制度をそのまま模倣できなかった。

大化の改新が西暦六四五年であるから、それから二十三年後の西暦六六八年、天智七年になって「近江令」二十卷が完成している。

この場合、日本は、国家秩序というような形だけは輸入した。中央集権の統一国家にする必要からである。ところが中味は導入せずに、従来の現実の政治体制を維持し、唐の律令体制が本来的にもつ儒教的社会にドップリと浸っていない。律令体制を導入した近隣の高句麗や新羅がドップリと儒教社会に浸って唐の律令体制をそのまま導入したのとは異っている。行政法である「令」でも唐の令を多く改修する必要があった。しかし、刑法である「律」は制定にいたらなかった。

## 5 受容から拒絶そして創造へのセンサ―

インド密教・バラモン教のような観念的宗教は、現世主義の中国人にとっては、未来とか、彼岸というようなものは体質的にも思考の面でも適合しないし理解を越えたものであった。

西暦八〇四年、三十才になった空海が、遣唐使船で入唐。長安で中国の人びとに受け容れられないで悩んでいたインド僧の恵果に出会い、青竜寺でインド密教を学び、曼陀羅・美術品・仏具などを仏教を理解する方便として持ちかえった。この仏像とか仏具にとりかこまれた空海の中で、当時の日本人は大日如来に向って「南無阿弥陀仏」と称えることで大宇宙を呼吸し、大宇宙に触れることができた。

中国を経由して日本に入ってきた仏教は日本の風土と日本的思考の中で日本化してくる。東南アジアの小乗仏

教は、一瞬一瞬、一日一日の人間の行動と生活のすべてが仏教であった。身動き、手足の動かし方まで仏教の作法で決まっていた。ところが日本に入ってくると、建物や仏像は立派につくられ、美しくなり、仏教美術はいよいよ美しく立派になるが、本当の宗教とか、哲学とかは二の次になってしまう。

遣唐使の一員として空海とともに唐に渡った最澄もインドの厳しい小乗戒が中国で緩和され、大乘戒となった仏教に触れ、中国の緩くなった戒律をさらに緩くして、ついにはその戒律までを仏教の修養からははずしてしまつた。法然はさらに、「阿弥陀仏」を思い浮べて、「南無阿弥陀仏」を称えれば成仏できると説き、親鸞はさらに戒律を捨てさつて、人間まるだしの生地まるだしの宗教にかえてしまつた。

鎌倉時代になつて、宋王朝から「禪」が入ってくると、禪の直観的な煩瑣な理くつがないところが、当時の質実剛健を旨とした鎌倉武士の心にフィットした。

ところがフランシスコ・ザビエルが何回も布教に日本へ訪れるが、ヨーロッパの天なる神の説明がつかず、しかも八百万神を信ずる日本人に、一神教を説いても拒絶反応を示すばかりなのに困まっていたが、武士から、「大日如来」としたら日本人に理解されるのではないかと教えられた。そこで、天なるデウスを「大日如来」と説いたら、日本人は外国人も「大日如来」を拝むのかと安心して受け入れた。しかし、ザビエルが「大日如来」をポルトガルのデウスに変えて説きだしたら抵抗を受けてしまう。そのザビエルはのち、ポルトガル語で次のように書いてある、「ポルトガルやスペインよりも日本の方がきれいで清潔だ。日本の女性の方がヨーロッパ人よりも肌が白い。日本人に一つだけ大きな欠点がある。それはキリスト教を信じないことだ」と。

拒絶と受容、憎悪と愛が繰り返えられるが外に窓を開いて異文化を受容し、異文化への愛を示した桃山・室町

時代には中国の明朝の文化やポルトガルやオランダを通じた西欧文化が受容された。この足利から豊臣までの受容期には「金」「金色」が、「金キラ金」が好まれる。ここでは、日本人の物の考え方、思考様式から生活様式、建築・お茶・お華・謡曲・能狂言・日本舞踊などの日本文化の型をつくりあげる準備が始まる。そして徐々に日本が外に向って窓を閉じる。江戸時代の鎖国のように、ここでは銀色、いぶし銀が尚ばれ、日本的なものが生まれる。受容と拒絶と日本の創造のセンサーが働いている。

## (二) 中国の異文化への対応

### 1、中国的思考様式のフィルター

#### (1) 多様性を多様のままに認識

中国の厳しい風土と歴史の中で培われてきた中華の人びとの独得の思考様式の一つのパターンとして指摘できるのは「現世主義」「現実主義」である。見えない世界、想いもとどかない世界については興味がなく、生きていく現世にのみ関心がある。したがって、中華の世界の人びとは現実の人の世、現実の人間の生活しか関心がなく、自らの人生についてあくことのない人生の価値・目的を追求している。したがって人世観だけでなく、世界観・自然観まですべて人間の関心、自己の関心を中心として展開されてきた。

人間を中心とし、自己を中心としてきた中華の人びとの現実主義は、また現実の世界をあるがままに、自分の都合のよいように、認識する。多様性を多様のまままで認識することを好んできた。その哲学の一つに『濠合論』が

ある。これも多様を多様で認識する思考である。山のせせらぎが谷川の流れとなり、いくつもの溪谷の水を集め合わせて、大河の流れとなることから来ているようである。楊子江や黄河のように、五〇〇〇から六〇〇〇キロの上流からいくつもの河川の流れを合わせて悠久のように流れるさまを象徴していたのであろう。

この「滙合論」の思考は、多様ないろいろなものを多様のままで合せ受容し、多様の姿で認識するという特徴がある。したがってここでは弁証法的統一が行なわれない。多様な姿の中で何かを選ぶとするなら、弁証法の二つの側面のいずれかである。例えば、二が合して一となるという「二合則一」論の立場か、一は必ず二に分れるという「一分為二」論の立場かのいずれかである。

現世主義と現実主義を重視する中華の世界の人びとは、その「滙合論」の哲学によって、多様なものを多様として、多様性をつつみ込んでしまおうとする。自然現象も社会現象も、人間の感情や思考や行為までもすべてそのままに認め、つつみ込む。したがって、分類とか帰納的方法が、また量的観察、老大な資料の蓄積・記録などが重要になる。

著名な司馬遷の「史記」をはじめとする歴史書などは、その代表的なものである。天体の位置と運動、暦の計算、楽器の音程、官職の定員・俸給・職制、刑罰の量的規定、貨幣の種類、経済政策、土木工事に関する資料など老大なデータの量的な蓄積とその数量的規則性や関連性をみいだそうとする努力がつづけられてきた。

したがって、中国では、数学は量的な数学である代数学が発展したし、天文学でも代数学的天文学が発達した。ギリシャの数学・幾何学、幾何学的天文学とは対象的であった。中華の人びとは、天体運動を自然にそなわる数（天の暦数と考える）として考える。音楽もまた自然の数を表現したものとし、音階は弦の長さではなく管の体積

によって定まると考える。易も度量衡も数によるとする。すなわち中華の世界の人々の特異な思考の一つとして数量的認識と数量的思考があるわけである。それ故に、インドやイスラムの天文学を受容する条件がなく、むしろ拒絶した。

中国における数量的思考は十進法などの世界的な意義を持つ成果をもたらし、算木や算盤などの計算器のほか、旅や航海に必要な羅針盤をも発明するという成果を収めることができた。

しかし、中国の数量的思考は、多様な事象を算術や代数によって処理してしまうという単純化が行なわれることになり、数量的な認識ができたとしても、規則性の発見はむづかしく、規則性をつかむには、数量以外の方法によらなければならなかった。そこで中国の人々は順序とか配列というような一種のパターン化した認識にもとづいた。

また、中華の人びとにとっての存在は、多様なものであるから、絶対・不動なものではなく、動いてやまない、相対的なものであった。それを中国では「氣」という。「氣」とは宇宙に充滿する連続的な物質——エネルギーというものであった。したがって、インドの原子説(極微)も受容しなかったし、今日の原子理論が生まれる条件がなかった。

また『易経』(戦国期末期)は、数量的認識にもとづいて、陰と陽の二元のさまざまな配列のしかたについて述べたものである。

このような、中華の世界の人びとの現世主義と現実主義にもとづいた『滙合論』によって多様な事象を多様なままに認識し、多様をつつみ込むことから数量的認識と数量的思考が豊かになり、あらゆる事象や人間の思考や意

志・感情まで数量的に認識した。宇宙の存在についても、その数量的思考を發展して、*「氣」*の理論が発生した。数学も代数学、天文学も代数的天文学が発生した。

その結果として、インド・イスラムや西欧の天文学を受容する条件がなく、幾何学的数学や幾何学的天文学などを受容することなく、拒絶をしてしまった。すなわち、数量的認識、多様性を多様で認識する思考。数学・代数学の才能と帰納法的認識の思考。相対的、二元的存在論の思考という中国的思考が、異文化に出会った場合、受容か拒絶かのフィルター役割を演ずる。

## (2) 帰納法的思考のフィルター

一五七七年、中国へのキリスト教布教のためにローマを出発したマテオ・リッチは、中国での宣教のためには、天文学・暦法・改暦・測量などの分野でも優れた独得の發展をし、それに強い関心を持っている中国に、西欧の近代科学を宣伝することが、布教に効果があると認めた。

リッチの「中国へのキリスト教導入史」<sup>(10)</sup>の中で、中国の数学は基礎を欠いている。明晰な論証である幾何学なしには科学的探求はできない。だからまずユークリッドの『エレメント』を翻訳して紹介するのがいいと考えたようである。このマテオ・リッチが口訳し、徐光啓が筆写した「幾何原本」はほとんどといって中国に影響を残さなかった。数学的な才能に富んだ、帰納法を尚んだ中国の学者は代数や三角関数などの分野での近代西欧科学の導入の成果は顕著なものがあり、多くの研究者を輩出しているが、演釈法による幾何学の分野での関心が薄く、研究はまことに寥々としたものであった。

ジェスイットの報告書<sup>(11)</sup>によると、「幾何学について言えば彼ら（中国人）はまことに浅薄である。定理と呼ばれ

る命題の真を証明する理論幾何学についても、問題解決のためにある特定のやり方を適用する技法を教える実用幾何学についても、きわめて貧弱な知識しか持っていない。かれらが何か問題を解決しようとすれば、なんらかの指導原理によつてよりも、むしろ帰納によつてなのである。

だからといって、測地したり境界や面積をしるしたりする器用さと正確さに欠けているわけではない。かれらが測量につかう方法は容易でかつ正確である」と。

ジェスィットが中国で布教の効果を挙げるため、西欧の近代科学を中国で教えようとした実体験から、中国の思考が演積的方法よりも帰納的方法で解決していくことを指摘していることは興味がある。

このような中国の帰納法に富んだ中国的思考というものの決定的な弱点は、演積的思考の欠如とでもいえる。西欧の近代科学の成立は実験主義と演積法によつて規則性と法則性を追求した科学的思考が西欧にあったからと言われている。ところが中国では数量的観測と帰納的方法が適したし、好まれたからで、演積法が欠如していたと言える。例えば仮説——推論——実験——検証というパターンが軽視されたためで、そこでは近代科学成立の可能がほとんどなかった。

## 2 中国語の言語的特徴のフィルター

中国語は孤立語で語尾の変化がない。文章の構成も文法よりもリズムによつて導かれている傾向が強く、その中国語の特殊な構造は中国人の思考様式や思想にいくつかの特質として反映してきている。

中国語には一つの品詞の機能をあらかじめ決定する文法上の規則がなく、それを決定するのは慣用的な言語表

現の場、言葉が使用される共通の理解の場である。品詞が機能を決めるのではなく、機能が品詞を決める。名詞・動詞・形容詞・副詞との本来的な区分がなく、主語と述語との区別もない。一つの語が同一文の中で、主語とも述語とも解される。こうした中国語の特質は中国の人びとの思考様式と思想とに影響を与える。

(1) まず、言葉の世界が完結していないため、言語はロゴスの探究が対象となり、実在の探究に変わってしまう。

(2) 主語と述語の区分が明確でないことから、主語に対応する実体の概念は最後まで成立しない。すなわち、動いてやまず、流動世界となる。ロゴスの探究の対象となる明確なフォルムを持った不動の存在というギリシャ哲学の世界は存在しない。したがって、論理学も幾何学も萌芽のままにとどまってしまふ。また言語の特性は分析的方法よりも、直観的方法の方がベターである。演繹的方法よりも帰納的方法で理解する方がベターである。マテオ・リッチが一六〇七年刊行の全七巻の「幾何原本」を口訳して、徐光啓が執筆したが、このヨーロッパの伝統的な学問の一つの代表でもある「幾何学」は何らの効用も中国の人びとに残さなかった。アリストテレスの「論理学」の註釈書もギリシャ人の公理と演繹法という思考方法も、帰納によって理解する中国の人びとの特徴から中国の中では理解されず、何らの効用も残さなかった。

### 3 官僚システムのフィルター

中国が過去に、とくに三〇〇〇年も以前から世界に優れた文化と科学分野での業績を持っていたことは衆知のことであるが、近・現代になって、西欧の近代文明が入ってきたとき、中国の文明、科学は西欧の科学文明に対



抗できなかった。その主な要因の一つに、「中国の官僚システム」があげられる。

① 官僚・読書人の価値規則のフィルター

中国の知識人——読書人の目標は官僚になることであつた。「儒教」における価値体系のパターンは『大学』に明らかにされているように、修身↓齐家↓治国↓平天下と順序立てた価値規準が決定されていた。修身は齊家のためであり、齊家の人物でなければ国を治めることはできないし、国を治めることが出来る人でなければ天下・世界の平和、天下の安定をはかることができないという。したがって儒教における価値規準の終局は治国・平天下であつた。儒教の教養・哲学を学んだ読書人が君子となつて天の道、天の命を講じ具体化し、天子が天に代わつて天の道、天の命を行なう、天の道を実践することであつた。では天の道や天の命はどのようにして知るかという、それはすでに、古代の聖人の言行に、顕在的に表現されたり、潜在的に表現されているからそれを学びとることであると考える。すなわち、古典的な教養が学問の中核であり、古典の注釈や聖人の言行の解釈であつた。同時に、聖人は天の命や天の道を実践を通して世人に教え、実現する理想的な政治的人間であつた。したがって、中国の学問ないし思想は読書人の倫理であるとともにそれは政治的実践の学問であり思想であつた。

なお儒教のほかに、戦国時代には墨家・法家・道家のほか諸子百家が出現したが、秦漢帝国の官僚主義的国家の形成とともに諸子学は儒道二教に収斂されてしまう。法家の立場をとつた秦王朝によって墨家がつぶされる。権力的支配にとつて技術者集団の墨家の主張と力が恐れられたためであろうし、法家は儒家の立場をとる漢王朝によって弱められ、官僚制の中に吸収された。儒家だけが最後まで近世まで生き残つたのは、儒教が家族倫理を

説き中庸の道を説いて、他の学派の思想を多く借用したこと、それが専制君主制の官僚制に適合した思想体系となったためであろう。道家は儒教思想の及ばない被統治階級としての下愚の一般大衆の生活の中に存在して裏から官僚体制を支える役割を演じた。それが儒家・道家が生き残った理由でもあった。

漢王朝末に仏教が導入された。その際、中国的思维のフィルターが作用して、選択的な導入をする。小乗戒の仏教を現世主義の中国人が戒律を緩めて現世的仏教、大乘仏教にしてしまう。

儒教は同時に、仏教・道教から吸収できるものをどんどん吸収して、宋時代の儒教、すなわち宋学として発展し、自己内面のモラルを核として、人間学をつくりあげる。他面で国家統治の政策論を展開するという体系化を行なって近代までつづいた。

すなわち、中国の思想・学問の究局の目標が治国・平天下という政治の目標を実現するためのものであったし、政治に奉仕するものであったとも言える。したがって、中国の思想・学問というものは科学のための学問、学問のための学問、という専門化を拒否した。したがって、近代的西欧の科学文明のような科学の発展や、西欧の近代科学文明の吸収を拒絶した。

一九四九年に樹立した中華人民共和国になっても、毛沢東社会主義の初期（一九四九年―一九五六年）はソ連式社会主義をモデルとした社会主義の道を歩いたために、ソ連型の社会主義の科学が導入され、ソ連モデル以外は拒否された。毛沢東社会主義の後期（一九五七年―一九七八年）には、政治が経済に、思想・政治が実務に、政治・思想が建設に優先し、政治・思想が科学に優先させられ、「読書無用論」によって教育が閉鎖されたこと。大学・大学院の学生・研究員が下放されて、山村の農林業に従事させられたために、教育の空白化となり、全国の知的

水準や科学技術者・研究者の水準低下となって中国の知的水準を低下させた。一九七九年以来の鄧小平式社会主義の時代には、豊かな社会主義を「スローガン」とした生産力拡大の各種政策、対外開放政策が展開され、日本・アメリカ・西欧の資金・技術・プラント及び経営管理などを導入している。しかし、ここで問題なのは、西側の技術を導入する場合、その技術体系を支えている技術思想・哲学・文化の全体系との関連系統及び技術の全大系によって支えられていることが軽視されて、総合的な技術体系の一部をつまみ食いして、利用しようとする。したがって技術の一部は生を失いながら利用されるだけで、そのあとの発展や創造というもののつながりがかけられている。ようするに、技術のモザイック的張り合わせでしかないということ。新しい技術体系をつくることにながらないうらみを持っている。

## ② 官吏登庸制度がフィルターの作用

官吏登庸の制度として「科挙」の試験制度が隋王朝期から清末まで実施されてきた。前述の通り、読書人の究極の目標は「修身」や「齊家」という個人的価値の追求ではなく、治国・平天下の公的価値の追及を理想とした。治国・平天下の理想の追及は官吏になることである。この官吏としてのエリートコースに乗るには「科挙」の試験に合格することである。この科挙の試験では古典の素養が問われた。官吏の理想・読書人の理想は天の命、天の道を天にかわつてすることで、その道は聖賢の道であり、聖人の言行に表現されていると考えることから、古典にかえり、古典を学ぶことであつた。科挙の試験ではこの古典の理解度、聖賢の道を問われた。したがって、官吏・読書人には經典や政治・社会への深い関心があるだけで、自然科学や技術などには何らの関心を示すことがなかつた。したがって、自然科学や技術に関する個人的関心を伸したり育てたり採用したりする制度がなかつた。また

自然科学や技術の研究をしたとしてもそれを社会に生かす道がなかった。すなわち、中国の科学の發達が近世になって遅れた要因の大きな主因は「科挙制度」という官僚登庸システムにあった。また、その影響は、近代西欧科学文明の受容においても、受容を遅らせたり、拒絶をするという作用をひき起すことになった。

一九四九年以降の中華人民共和国の時代になると、科挙制度による官僚主義的な制度は中国共産党による官僚主義制度にかわり、その官僚主義の欠陥・弊害はより助長された。その人事制度における任用・昇進のシステムは、「任人唯賢（人の任用はその賢者であるかどうかを基準として選抜）」という賢明な当然な方法をとらず、「任人唯親」（人を任ずるに、親族や知人・派閥を基準として行なう）というように、いよいよ派閥主義・宗派主義が横行し、任命・財産・名譽を護持し發展・強化するために權力ポストを維持することに懸命となつて、国家の命運、社会主義の命運など眼中にないという黨員・幹部が増大している。これらの官僚主義的氣風は經濟を發展させ、生産力を向上しようという十三期党大会の中心任務に対しても、對外開放政策によつて、中国の經濟・科学技術・國防の發展をはかろうという方針に対しても、その支持をさかどうかの判断基準は、派閥の利益に合致するかどうか、グループや単位の利益に合致するかどうかによつて律せられる。したがって、對外開放への支持が不安定であり、科学技術の西側からの導入、科学技術の自力による發展・向上も不安定である。

#### 4 中華意識のフィルター

##### (1) 天命思想

中華の世界の人々にとつて、中国は世界の中心であり、中国の文化は世界で最も優れ、中華の人びとは世界で

最も優れているという中華意識といはれる誇りを持っている。確かにそれは疑いもない事である。しかもその反面で、あまりにも強過ぎる誇り高い中華意識が現れると、外来の異文化に接したとき、その優れた最新の異文化も、その源は中華の世界、中華の文化にあると考える。すなわち、同質・同根の文化として対処するために、異文化の吸収にはつとめるが、発展させることがない。異文化を異質な文化として対立したものとして考えないから、外来文化の消化・発展・中国的創造というものをしない。むしろ、導入した異文化の成果だけを利用するが、その成果が出来あがるプロセスと理論を軽視する。政治的民族とも言われる中華の人びとの実用主義があらわれる。そこでは、発展とか創造というものが忘却される。この傾向は現在の中華人民共和国の政治と政策にもより継承されていて、その近代化と発展とを阻害している。京大の著名な数内清教授が戦前に書かれた名著「隋唐曆法史の研究」<sup>(4)</sup>の中で次のように指摘している。

「殷周以来、中国には経緯にもとづいた高い水準の暦法があり、とくに隋唐時代の暦法は後世の範となっている。その頃、インド天文学が伝えられた。インド天文学はバビロン・ギリシャの天文学の影響のもとに発展したもので、中国の在来の暦法と比べると極めて理論的で優れていた。元来、中国の天文学は天命思想にもとづいた政治色の強いものであった。すなわち、天の命による統治のための政治力の一つとして、政治目的に利用された。したがって、政治によって保護されて早くから暦法が開け、進歩していた。しかし、その反面で、天意に従従する暦を作ること、編暦に必要な領域だけが重視され保護されて、学問としての天文学の発展の余地がなかった。これはまことに中国の天文学の不幸であった。渡来したインドの天文学者も、単に日月食や暦の推算にだけ従事し、その計算結果だけが参考にされた。古く高い文化を持ち、世界即唐という観念にとりつかれた唐代の学者が、遠

来の新しい天文学に知識を求めようとはしなかったことは当然のことかも知れない。このように唐代には水準の高い天文学の理論を知るチャンスがありながら、みすみすその機会を失ったことは中国文化の発展のために惜まれる。異種の文化を包含してこそ新しい文化の創造があるということを深く感じている」と。

唐時代の次に、西方の天文学が伝来したのは元の時代である。これは西方天文学の二回目の伝来である。ペルシャ人の天文学者が中国に伝来、ギリシャ天文学を基礎に発展したイスラム天文学を伝えた。ところが、イスラム天文学の理論や計算法はほとんど採り入れられず、影響をとどめなかった。伝来したイスラム天文学者は新しく観測器機をつくり、天文観測を行なった。それだけはいくらか中国人の天文学者の間にも伝えられた。

明末に、西洋天文学の第三回目の伝来があった。イエズス会のカトリック宣教師が中国へ布教におとずれた。最初の著名な宣教師はマテオ・リッチ（利馬竇）で、彼は天文学・数学・幾何学に深い教養を持っていた。中国の指導者たちが、天文学に強い関心を持っていること、天文学を説くことで尊敬されることを認識してローマへ彼は報告した。そこで天文学に造詣の深い宣教師が中国へ派遣されてきて、西洋の天文学を紹介した。しかし明代の中国の指導者は、西洋天文学を利用して改暦しようとしたにすぎなかった。清王朝にもキリスト教の宣教師たちが渡来したが、西欧の近代科学や天文学を紹介することが仕事ではなく、布教が任務であるから、清王朝の満州人や漢民族の指導者の意向に反することを避けた。そのため、清朝時代の天文学がまた新しい発展をするチャンスを失った。

すなわち、中華意識の誇り高い思考がフィルターとして作用して、実用的な選択的受容をした。

## (2) 「中体西用論」

宋時代の儒学が仏教から借用した「体用」の概念が、西側の文化を導入する際に、悪い影響を与えた。

朱子によると、主体と作用、体と用との関係を感じの器官と感覚との関係で理解した。

すなわち、耳は主体で、聴覚が作用。目が主体で、視覚は作用とした。陰陽で言えば、陽は作用(用)、陰が主体(体)。主体の陰がより根源的(静)で、作用の陽が派生的(動)なものとしてとらえている。そして、静から動へ、動から静へと転換する。主体(体)と作用(用)とが相互転化する連鎖反応によって対象的世界をつかもうとする。この体用の論理は一つの語が主語となったり、述語にもなるという中国語の構造の反映でもある。すなわち、体と用の思想は中国では潜在的にかつ本来的に持っていたものである。

したがって、近代西欧文化を導入しようとした際にあらわれた「中体西用」論は中国が本来的に持っていた中国の伝統的思考の側面といえることができる。

一八四〇年のアヘン戦争の敗北で、中華の外の世界、中国的表现では「化外」(蛮族)の世界にも優れた文化があることを認識せざるを得なくなり、西欧の近代文化の導入につとめるが、その誇り高い中華意識・中華思想から「中体西用」論を持ちだした。中華意識の面目を保つために、中国の古い文化が体(主体)であり、西欧の近代文化は用(作用)である。中国の文化・学問が本体であって、西欧の文化・学問は中国の文化・学問の応用・発展したものだとして自己満足した。

たしかに、三千年以上にわたって中華の民は文化・数学・技術・自然科学を発展し、その成果が、ヨーロッパのルネッサンスにインパクトを与え、近代科学形成の主要な要因の一つとなった。また十七世紀から十八世紀の西欧の思想家達に中国の思想・文化が影響を与えたことも確かであった。

このような中国文化・学問の誇り高い伝統とこの誇り高い伝統を誇る中国の文化人・思想家・学者たちは、西欧の近代文化に直面したとき、大変なショックを受けた。その際、西欧の近代文化・学問・思想・科学の導入・吸収にあたって中国の古典、中国の伝統的文化・思想・学問の中に西欧の近代文化の淵源を求めるといふ考古・考証的学問が発展した。すなわち、中国の文化・思想・学問と西欧の近代文化・学問・思想・科学技術とが同質なものと考え、里帰りと考えた。中国の古代の世界の四大発明と言われた「紙」「印刷」「火薬」「羅針盤」が西欧の近代化の中で進歩・発展して、近代的姿となった紙・印刷・火薬・羅針盤として本家の中国へ帰って来たと考えた。したがって、西欧の近代的文化・学問・科学と中国の文化・思想・学問とは同質なものと考えた。同質なものと考えるが故に、矛盾・対立・弁証法的な統一というプロセスが軽視される。導入・吸収した西欧の高い水準の近代文化を發展させようとする思考様式・思考作用が作動しなかった。したがって、導入・吸収した近代西欧文化を中国で發展させ、中国的創造をするということをしなかった。

新中国になっても、マルクス・レーニンの理論・共産主義社会の理論は、中国の古典の「大同の世界」の理論である。古くから中国にもあった理論<sup>(15)</sup>として、ソ連社会主義を鵜呑みにして適用した。さらに、毛沢東思想は現代マルクス主義の最高峰だという主張<sup>(16)</sup>が一九六八年にはあらわれるにいたっている。これも「中体西用論」の変形である。

一九八七年七月二十八日の「人民日報」「學術動態欄」の「對外開放・對內活性化と觀念改革」の記事<sup>(16)</sup>でも、かつての「中体西用論」が、今も存在して、西側の先進技術の導入を妨げているから徹底的に排除すべきだと次のように指摘している。



「外来文化の導入にあたって、どう対応するかが、現代化を進める上で最も尖鋭な問題となっている。改革と開放の中で、外国から資金と技術を導入して現代化建設をしている。外国の管理制度の方法や経験もまた紹介されている。しかし、その文化を導入するかどうかについては認識が一致していない。

外来文化——その主なものは西側の文化であるが、それに対する評価だけでなく、わが国の伝統文化に対する認識でも同じようであった。近代になっても、中国人を摩靡している思考は、やはり、中国の物質文明はおくれているが、精神文明の方では進んでいるということであった。この論理から『中体西用論』なるものが導きだされた。或る多くの同志は次のように言っている。『中体西用論の陳腐な論理はまず、中国の伝統文化の落伍と西方文化の先進的な面とを無視しただけではなく、世界の潮流の変化をも無視して、依然として『中央大国』の陳腐な考えを抱いている。

そして、世界の多数の民族や各種文化とも平等な一員であるという認識をも欠いている。世界の他民族の文化との正常な対話や交流もしていない。この『中体西用論』の陳腐な考え方は、実際には伝統的文化を特殊化し、神祕化して、伝統的文化を民族の盛衰興亡の上に置いた。また多くの同志は、次のような鋭い指摘をした。『民族は文化の媒体であり、民族の盛衰存亡は文化の優劣を判定するものである』と。社会主義の現代化建設を進めている今日においては、『中体西用』論なる陳腐なものを徹底的に廃棄しなければならない。中国の伝統的文化の中で遅れているものを捨て去って、外来文化を科学的に取捨選択し、吸収して、中華文化を流動的にし、多元化し、開放化して、生き生きと休むことなく、断絶することもなく、大きな流れとなって世界の先進的文化の林の中に身を置くようにしなければならない。当然のこと、外来文化の中の優れたところと劣ったところを区別しなけ

ればならない。

また多くの同志は『中体西用論』のあやまりについて、『科学技術というものを全体的な文化構造の中から引き裂いてしまうことである』と指摘した。世界の歴史的経験からみても、先進的外来文化を導入するということは、その文化の背景にある全体的な構造から系統的に考察することである。さもないと、先進的技術を学ぶことも、ましては現代化建設なども出来るものではない。

——社会主義制度の優越性を説明するために、中国の物質文明は低い、精神文明は高い。西洋の物質文明は高いが、精神文明は低いという古い言い方をしていると、精神文明を建設する緊急性と必要性とが否定されてしまうことになる。

改革・開放と精神文明の建設ということを対立させてしまうことにもなってしまう。或る同志は、その結果、『今は昔にしかず（今不如者）』と言ひ、現今の精神文明は文革の十六年にも及ばない』と言つて、精神文明建設の意義を最も貧困なものとしている』と。このように、今も『中体西用論』の亡霊が生きていて異文化の受容を妨げている。

（未完。以下次号）

注(1) 第一次大戦後のパリ―会議で、中国が要求した日本の二十一ヶ条要求の取り消しや、山東の権益返還が容れられなかったことから、一九一九年五月四日、北京の大学生が条約反対・日本排撃を叫んで起したデモに端を發して、全国的に広がった排日排外ならびに中国の改造運動のこと。五月四日の運動を五・四運動という。

(2) 一九一九年、中国の近代化にとっては、中国人が、自分の思っている事を自分の言葉で平易に話すことができ

なければならぬと、言語の口語化運動を胡適が提唱した。

- (3) Russell, B. *The Problem of China*, London, 1966, p.194.

- (4) 一九八七年十二月二十八日のAP電

- (5) 簀内清著「日本と中国科学」(岩波文庫)

- (6) 全 右 「中国の科学と日本」(朝日選書)

- (7) 和辻哲郎著「続日本精神史研究」(岩波書店)

- (8) 「日本人と日本文化」ドナルド・キーン、司馬遼太郎著(中公新書)

- (9) 註(8)に同じ

- (10) 山田慶児著「混沌の海へ——中国的思考の構造」(朝日選書)

- (11) 註(10)に同じ 10 ページ

- (12) 註(10)に同じ 14 ページ

- (13) 張東蘇著「從中国言語構造上看中国哲学」(東方雜誌33—7)、註(10)に同じ

- (14) 簀内清教授著「隋唐曆法史の研究」(昭和十九年一月初版、三省堂)

- (15) 一九六八年六月一日「人民日報」

- (16) 一九八七年七月二十八日『人民日報』學術動態欄「對外開放、對內活性化と觀念改革——上海理論工作者的改革に

関する理論討論の紹介——

※ 本稿の執筆に際し、引用もしくは参考に利用させていただいた資料・論文及び著作は次の通りである。

- ① 簀内清著「中国科学と日本」(朝日選書)
- ② ドナルド・キーン、司馬遼太郎著「日本人と日本文化」(中公文庫)
- ③ 蔵並省自著「外来文化との交流による日本史の展開」(三和書房)
- ④ 山田慶児著「混沌の海へ―中国の思考の構造」(朝日選書)
- ⑤ 貝塚茂樹著「日本と日本人」(文春新社)
- ⑥ 和辻哲郎著「続日本精神史研究」(岩波書店)
- ⑦ 石田英一郎著「日本の外来文化受容と文化源泉」「日本文化論」(筑摩書房)
- ⑧ 「東西文化交流―漢とローマ」(平凡社)
- ⑨ 「東西文化交流―唐とペルシャ」(平凡社)
- ⑩ 伊瀬仙太郎著「世界文化交流史」(金星堂)
- ⑪ 小林高四郎著「東西文化交流史」(西田書店)
- ⑫ 簀内清著「中国の科学文明」(岩波新書)
- ⑬ 林屋辰三郎著「日本の古代文化」(岩波書店)
- ⑭ 岩村 忍著「東洋史の散歩」(新潮選書)